

国語教育における新美南吉「ごんぎつね」の主題に関する考察

近藤政美 遠藤雅子 濱千代いづみ

キーワード：「ごんぎつね」 主題 国語教育 新美南吉 文学作品

1 はじめに

新美南吉の「ごんぎつね」は、現在、小学校国語教科書の出版社6社すべてが4年生の教材として取り上げている作品である。新美南吉の「スパルタノート」^(注1)の1931年10月4日の項に、「赤い鳥に投ず」と記された「権狐」が「最初の草稿と考えられる」^(注2)。これは「ごん狐」として雑誌『赤い鳥』1932年1月号に掲載された。掲載に際して、鈴木三重吉による改変が行われた。それはことばのレベルで見ても、語句の削除、語句の挿入、語句の置き換え、語句の位置換え、文の書き換え等、諸種にわたるものであった。このように「スパルタノート」の「権狐」(以下、草稿)と『赤い鳥』の「ごん狐」(以下、定稿)という2種の作品が存在し、小学校国語教科書の共通教材の「ごんぎつね」の本文は後者に拠っている。本論では、「ごんぎつね」の主題に関して、草稿と定稿の問題を考察し、文学教育の指導にどのように生かしていくべきか、論述したい。

2 文学作品における主題

2-1 一般的な主題

『広辞苑』第5版^(注3)で「主題」の項目を見ると次のように記述している。

しゅ - だい【主題】〔名〕

① 主要な題目。

② (Thema (ドイツ))

⑦ 芸術作品などの中心となる思想内容。テーマ。

⑧ 楽曲の全体または一部分の基礎となり、その旋律的・和声的・律動的発展が楽曲を多様に展開させるもの。ソナタ形式では、普通、第1・第2主題など、複数の対照的な主題を有する。テーマ。

『日本国語大辞典』^(注4)では次のように記述してある。

しゅ - だい【主題】〔名〕

- ①主要な題目。
- ②ある事柄で中心となる問題。主たるテーマ。
- ③小説、芝居、映画など芸術作品で、作者の主張の中心となる思想内容。テーマ。
- ④音楽で、ある楽曲を生み出し、展開させる楽想の中心となるもの。ソナタ形式では、最初にいくつかのまとまった小節で提示される第一主題と、それを展開させた第二主題とがある。

「主題」の意味は多義にわたる。この中で文学作品における主題に関する記述は『広辞苑』の②㊦及び『日本国語大辞典』の③である。ただし、後者の「作者の主張の中心となる思想内容」については「読者の受け内容における重なり合うイメージという線で文学作品の主題を考える。送り意図における主題イコール受け内容における主題ではない。」(「文学にとって主題とは何か」熊谷孝氏^(注5))という異なる考え方が存する。

2-2 藤掛和美氏の主題に関する考え方

藤掛和美氏は「国語教育における文学作品の主題——『物くさ太郎』を例にして——」^(注6)において、そのまとめで次のように記述している。

- 文学作品を授業で扱う際、教授者は次の諸点に留意する必要がある。
- (一) 文学作品の主題という時、作者、作品、読者の実存的な関係において原主題、公主題、私主題が存在する。
 - (二) 授業の中では、教授者がつかんだ主題が公主題となる。その公主題には、状況に応じた教育的配慮が加味される場合がありうる。
 - (三) 学習者にはそれぞれに私主題が存在しなければならない。そしてそれらの私主題は教授者の公主題と一致するとは限らない。
 - (四) 殊に寓意性に富み、しかも構成が未熟なお伽ばなしの如き作品の場合には、さまざまな私主題が存在しうる。

2-3 本論における主題の捉え方

本論では藤掛氏の主題の捉え方を参考にした。そして文学作品の主題について「原主題」「公主題」「私主題」の三種類を設定する。

「原主題」・・・作者が宣言した主題。

「公主題」・・・読者の共時的な場における主題。授業の中では、教授者がつかんだ主題。場合によって、状況に応じた教育的配慮が加味される。

「私主題」・・・読者の読み取る主題。作品の研究者や評論者が作品の諸要素を分析研究して設定する主題。

先にこの三種類の主題の視点にたつて森鷗外「高瀬舟」の主題をどう捉えるかという問題^(注7)に関して考察した。この作品には「高瀬舟縁起」があり、そこに原主題が提出されている。

3 草稿「権狐」と定稿「ごん狐」で提出された問題

「ごん狐」の場合、新美南吉の書簡や日記とともに改変される前の草稿「権狐」の存在することが明らかになった。さきに設定した本論の主題の捉え方によると、草稿の主題が原主題になる。が、作者のこの作品の主題に関する記述はない。そこで、この草稿と定稿とで主題に異同があるかどうかということが問題になった。従来は斎藤寿始子氏^(注8)をはじめ多くの研究者が主題に関しては同じだという見解を示してきた。ところが近年、沢田保彦氏、水沢不二夫氏がそれぞれの立場から、草稿と定稿を比較して、主題には大きな違いが存するという見解を提出した。

3-1 沢田保彦氏の捉えた主題

沢田氏は「草稿『権狐』と定稿『ごん狐』の比較・検討からの提言」(『新美南吉記念館研究紀要』第7号)^(注9)において次のように述べている。

権狐の人物像を見てくると、作者が意図したものと、修正者が意図したものとが食い違ってしまったと言わざるをえない。

不確かなこと、謎めいたこと、不安を与えること、そういうことを「狐の仕業」として人々は言い伝えてきた。それを間違いなく狐の仕業であると断定することによって、それを主人公に仕立て上げて物語を展開させようという全く斬新な着想をもとにして「権狐」は作られた。そして、権狐は、若者の悩み、苦しみを訴える使命を持たされながら登場した。しかし、それは、修正者の理解を得ることができないままに、見事に書き換えられてしまった。何度も繰り返すが、修正者の意図したものは、やんちゃないたずら坊やが、最後は応報を受けるという物語なのである。この異なった意図が、作品の至る所で矛盾をもたらしたために、修正者は、信じられないほどの多くの箇所^(注9)の修正をせざるをえなくなったのである。

その根拠の1つとして定稿での次の修正をあげている。

兵十のお母は、床についてゐて、うなぎが食べたいと言つたにちがひない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたづらをして、うなぎをとつて来てしまった。だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることが出来なかつた。そのまゝお母は、死んぢやつたにちがひない。あゝうなぎが食べたいとおもひながら、死んだんだらう。ちよっ、あんないたづらをしなけりやよかつた。

草稿では「それでお母は、死んぢやつたに違ひない。」とある。沢田氏は「『それで』と『そのまゝ』とでは、大きな違いである。」という。南吉の育った愛知県半田市では、「それで」を「それが原因で」のほかに「そして」「そのようにして」という意味でも用いられている。この使い方を沢田氏はよく理解していない。

木村功氏は草稿と定稿との異同表を作成し、この部分について「『それで』だと、鰻が食べられなかった事で直接死んでしまったように受け取られかねないので、『そのまゝ』と表現が改められた。」と解説している。^(注10)

草稿ではこの3文前に「それで兵十は、はりきり網を持ち出して、鰻をとらまへた。」とある。「それで」という接続詞が近いところで繰り返し使われている。修正者は美しい文章を目指して同語の使用を避けつつ、鰻を食べないことが死に繋がったというような非現実的な誤解を招かないため、「そのまゝ」に改変したのではないかと推察する。

沢田氏はさらに次のように述べている。

煎じ詰めれば、意志が伝わらないことをもどかしく思う「片思い」の心の葛藤である。若者特有の一方的な思い込みによる自己中心的な論理の展開がここにある。相手がどう思うのか、相手と自分の関係がどうあるかということ冷静に見ることが出来ないままに、ただひたすら自分だけで悩み苦しんでいるのである。

そして、勝手に相手がこう思っているであろうと断定的に思い込み、自分の行為を恥じ、自分を改めようともがき苦しむという形は、若者の「片思い」の心の葛藤に他ならない。この南吉の孤独の論理に、現在共感する若い人たちが多くいることに驚くばかりである。

このように、沢田氏は草稿の主題を「意志が伝わらないことをもどかしく思う『片思い』の心の葛藤」と捉えている。また定稿の主題も上記に引用したように「やんちゃな

いたずら坊やが、最後は応報を受ける」と捉えている。

3-2 水沢不二夫氏の捉えた主題

水沢氏は「新美南吉『ごん狐』における鈴木三重吉の改稿の位相^(注11)」で、鈴木三重吉の改稿の基準として、第一、〈語り物〉から〈読み物〉への転換、第二、〈限定された少数〉の読者から〈不特定な多数〉の読者への語彙の普遍化、第三、〈悪かった狐の改心〉の設定の三つを提示している。この第三の改稿の基準によって、三重吉は「草稿の一貫して愛されるべき『ごん』のドラマを、憎まれる『ごん』から愛すべき哀れな『ごん』へと変身するドラマへと変更してしまっている。」「三重吉は『ごん』の行為を意識的な〈悪〉として形象し直してしまっているのであり、子供と通有する無意識の行為の結果としての悪戯という面が捨象されてしまっているのである。」という。水沢氏は「私には、この孤児のさみしい『ごん』の絆を求めるところにこそ作品のモチーフが見られるのである。」「南吉にしてみれば、『ごん』の行為は無意識の行為の結果としての悪戯であった。そして自己中心的世界観から目覚め、他者を意識してゆく方向で物語は進行させたつもりであったろう。」と述べている。

このように、水沢氏は草稿の主題を「孤児のさみしい『ごん』の絆を求めるところ」と捉えている。そして、定稿の主題は「悪かった狐の改心」と捉えている。

4 教科書の指導書の提出した主題

4-1 光村図書『国語 四年下』の指導書に記述された主題

光村図書では、「ごんぎつね」を、読解を中心とした文学教材として扱ってきたが、平成14年度の改訂で、従来と異なり、「自分で選んで」という単元の1教材として位置づけるようになった。

そこには、主題として以下のように記述されている。^(注12)

善意をもってした行為が、相手に理解されない。かえってその行為が、相手を傷つける結果になってしまう。こうしたことは、われわれの日常生活の中でも、しばしば起こりうることである。

愛が純粹で、しかし少し配慮に欠けていて、それで思いは通じず悔恨の苦味を味わう。相手は状況がつかめず、迷惑で、愛を理解したとしても、もうそのときは、お互いの状況は変化している。心の交流の喜びと悲しみは、児童たちも経験しており、鋭敏でもある。

このように、光村図書では公主題を「心の交流の喜びと悲しみ」と捉えている。

4-2 学校図書『小学校 国語 4年下』の指導書に記述された主題

学校図書では、「ごんぎつね」が「思いを深めよう」という単元で「物語の叙述をもとに登場人物の行動と心情の移り変わりを読み取らせるための物語学習材」として取り上げられている。

「学習材研究」の〔主題〕の項には、「ごんも兵十も貧しく孤独な境遇にあり、共感し理解し合える間柄なのに、殺し・殺されるという形でしか心が通じ合わなかった痛ましさ」と書かれている。^(注13)

また、〔構成〕の項で主題を「償いを通して、ひたむきに心の交流を求めた孤独なごんの気持ちが、その死をもってしか通じなかった悲しさ」と示している。

4-3 指導書の提出している主題

以上、指導書の提出している主題を見てきた。それに教育出版をあわせて列記すると次のようになる。

- (1) 光村図書：「死をもってしか通じ合えなかった心の交流の悲しさ」
- (2) 学校図書：「ごんも兵十も貧しく孤独な境遇にあり、共感し理解し合える間柄なのに、殺し・殺されるという形でしか心が通じ合わなかった痛ましさ」
- (3) 教育出版：「償いを通して兵十に心の交流を求めたごんのひたむきさと、死を通してしか理解し合えなかった悲しさ」^(注14)

3社とも、「心の交流を求めながら通じなかった悲しさ」を公主題としながらも、児童の発達段階を踏まえて、そのごんの気持ちは死をもって通じたというように解釈させたい方向にある。

5 研究者の捉えた定稿の主題

5-1 安藤美紀夫氏の捉えた主題

安藤氏は『児童文学』^(注15)において、「ごんぎつね」の主題について以下のように記述している。

ごんは兵十のたった一人の母の死を知ってから、ひとりぼっちになった兵十に身近な親しみを感じて接近していく。(略)自分のいたずらのために、兵十はおっかあに好きなうなぎを食べさせられないで死なせてしまったのだ、ときめつけてしま

う。そして、心からすまないことをしたと反省する。(略) 危険を冒してまで、いわしを投げ込んだり、くりやまつたけを持って行くごんの行為の重さ、言い換えれば、ごんの反省の深さがあの劇的な結末に真実性を与えているのであり、そこにはひとりぼっちになった兵十への共感ではすまされないものがある。(略) ところが、兵十はそうしたごんの反省とは無関係の所に居る。その反省とつぐないの行為がごんの側に、つまり、一方的であるだけに、その後のごんの行為を一層哀しいものとしている。(略)

一方的な思い込みにより、うなぎのつぐないをしようとして兵十に接近したごんの真心は一向に通じる様子がない。しかし、人間と狐と言う宿命の上に劇的な解決がなされる。兵十はごんの姿を見付けてとっさに銃を取ったのである。ドンと撃った後、土間にかためて置いてあるくりを見て、兵十は初めて事の次第を察します。(略) 「ごん、おまえだったのか、いつも、くりをくれたのは。」と言う兵十の言葉には、ごんへの思いやりと愛がこめられている。一方ごんは、「ぐったり目をつぶったままうなずきました」と物語られていて、兵十をうらむ心は微塵もなく、かえって、兵十への思いの達したことを幸せに思っている。完全にごんと兵十の心が一つに通じあったのである。しかし、その瞬間、兵十は火なわ銃を「ばたりと、取り落とし」ます。この簡潔な描写の中に、善意によって接近して来たごんを撃ってしまった兵十の激しい後悔がみごとに表現されている。(略) そこには、「人間に嫌われる狐」、そうした観念の世界を打ち破って、お互いに理解し合う喜びと尊さと、それを得ることの厳しさ、困難さと言うものが強い感動を伴って描かれている。

「ごんぎつね」は、ごんの感動的な死を描いて、人生における高度な喜びとは何かを、わかりやすく物語った作品なのである。

安藤氏は定稿の私主題として「お互いに理解し合う喜びと尊さと、それを得ることの厳しさ、困難さ」を提出している。

5-2 続橋達雄氏の捉えた主題

続橋氏は『南吉童話の成立と展開』^(注16)において、「ごんぎつね」の主題について以下のように記述している。

自分だけが孤独だと思っていた小狐のごんは、自分と同じ一人ぼっちの人間(貧しい農民)を発見、その母にすまないことをしたとの贖罪の思いをこめ栗などをせ

せと運ぶ。それは、お互いの孤独やさびしさをあたためようとの求愛行動であった。それが死をもって完結するところ、〈悲哀は愛に変わる〉浪漫的心情の、文学少年らしい表現であった。〈青い煙が、まだ筒口から細く出てゐました。〉との結びの一文に、はるかな世界への夢をこめながら……。

続橋氏は定稿の私主題として「お互いの孤独やさびしさをあたためようとの求愛」を提出している。

5-3 その他の諸氏の捉えた主題

一川鐵夫氏は、論文『「ごんぎつね」における主題指導に関する考察^(注17)』において、主題を次のようにまとめた。

「ごん狐」の主題は、最も抽象的に言えば「愛の昇華」であると解する。これを具体的に言えば、「孤独とはかくも辛いものであり、孤独から抜け出そうとするときの苦しみはどんなに大きいものか。」とすることと、「人を愛する本当の姿とはどういうものか。」の二点に絞られるものになると思う。

このほか、安藤操氏、蓑手重則氏の捉えた主題を紹介しておく。

〈安藤氏^(注18)〉

誤解(?)によるつぐない(反省の心と兵十と同じ一人ぼっちの存在をわかってもらうためのひたむきな行為)が、ついに死をまねいてしまった一人ぼっちのごんと兵十の話。そのいじらしさ・あわれさ・悲しさ。=(主題・方向性)

〈蓑手氏^(注19)〉

いたずらのつぐないをしようとした孤独なごんぎつねの善意も、同じ孤独な兵十の心には通じなかったばかりか、かえってうち殺されてしまったこと(作品の題材形象)は、まことに悲しく痛ましいことである。(作者の価値意識)

6 おわりに

新美南吉の「ごんぎつね」は小学校国語教科書の共通教材である。現在、「スパルタノート」に記述された草稿「権狐」と、雑誌『赤い鳥』に掲載された定稿「ごん狐」という2種が存在し、教科書採録の「ごんぎつね」は後者に依拠している。本論の主題の捉え方によると草稿の主題が原主題になる。しかし、作者は主題に関する記述を残さな

かった。そこで、草稿と定稿で主題に異同があるかということが問題となった。筆者3名は各自が原主題を推測し、討論した結果、草稿の私主題を提示することにした。定稿の主題についても同様の手続きを経て考察した。以下、本論で扱った主題を整理しながら、筆者の捉えた主題について記述する。

6-1 本論で扱った主題の整理

本論の第3章では草稿と定稿とで主題に相違があるという沢田氏、水沢氏の説を紹介した。両氏の提出した草稿の主題・定稿の主題は、本論の捉え方によると、ともに私主題にあたる。沢田氏は草稿の主題を「意志が伝わらないことをもどかしく思う『片思い』の心の葛藤」、定稿の主題を「やんちゃないたずら坊やが、最後は応報を受ける」と捉えている。水沢氏は草稿の主題を「孤児のさみしい『ごん』の絆を求めるところ」、定稿の主題を「悪かった狐の改心」と捉えている。筆者には、想定年齢の高低の差異はあるものの、両氏が共通して草稿の主題を「心の交流を求める」ことと把握していると解される。また、定稿の主題も「応報」「改心」という違いがあるものの、両氏が共通して教訓的傾向に把握していると解される。

本論の第4章では教科書の指導書が提出している公主題について、光村図書・学校図書・教育出版を取り上げて比較検討した。その結果、3社とも共通に、「心の交流を求めながら通じなかった悲しさ」を公主題として提出し、児童の発達段階を踏まえて、そのごんの気持ちは死をもって通じたというように解釈させたい方向にあることが判明した。

本論の第5章では研究者の捉えた定稿の私主題について、安藤氏、続橋氏、その他3氏の説を取り上げて紹介した。安藤氏は主題を「お互いに理解し合う喜びと尊さと、それを得ることの厳しさ、困難さ」、続橋氏は「お互いの孤独やさびしさをあたためようとの求愛」と表現した。両氏は共通して主題を「心の交流を求める」ことと把握している。その他3氏の場合も、主題把握の基盤となる部分は安藤氏、続橋氏と同じである。研究者の捉えた定稿の私主題を検討した結果、共通して「心の交流を求める」ことに置いていることが明白になった。

従来、草稿と定稿の主題は同じだという見解が示されてきた。が、それは双方の本文を比較対照し立証するという文献学的方法に基づいていたわけではなかった。定稿の本文は広く知られていたが、草稿は近年になって一般の目にとまるようになった。この事情を反映してか、上記のように研究者諸氏の把握した主題はもっぱら定稿に拠っている。今回紹介した沢田氏の説は、草稿に踏み込んで詳細な本文考証を行い、それに基づ

いて主題を提出している。その点において大いに意味のある研究である。

6-2 筆者の捉えた主題

筆者3名は各自の捉えた草稿の主題を持ち寄って、以下のような本文の検討を行い、結論に至った。

権狐は「一人ぼつちの小さな狐」で、年齢の低い孤児という設定で登場し、悪戯を繰り返す。雨あがりの久しぶりの外出を喜び、兵十の漁に興味を抱いて近づき、魚籠をのぞくと「ふといたづら心」が生じ、魚籠の中の魚を川へ放りこんでしまう。少しもじっとしてられなくて、自分の興味関心を抑えることができないまま行動し、その結果が村人や兵十にとってどんなに迷惑であるかなど考えない。この行動様式は年齢の低い児童によく見られるものである。

作者の新美南吉は1931年4月から5か月間、母校の半田第二尋常小学校（現在の岩滑小学校）で代用教員を務めた。2年生の担任となり、子供たちに自作の童話を聞かせることもあった。離任後は教え子と共有した場面場面をなつかしく回想している。草稿は同年の10月に成立した。このような事情は、権狐が年齢の低い孤児に設定されているという理解を補強すると考える。当時、恋愛で悩んでいた様子も書きとめられているが、筆者は沢田氏の想定した「若者の一方的な思い込み」には同意しかねる。

権狐は、兵十も「俺と同じ様に一人ぼつち」になったと思った時から、「何か好い事」をするようになる。そして「もう悪戯をしなくな」る。悪戯は、孤独でさびしい権狐が、孤独ではなく相互に繋がっている村人に、自分の存在を誇示する手段であった。同じ境遇の兵十を見出して、善意を贈り物という形に示して、交流を持とうとしたのである。しかし、その意図は兵十に通じず、神様のお恵みだと誤解されてしまう。最後に火縄銃でうたれた権狐は、兵十に認められて「うれしく」なる。権狐が求めてやまなかったのは自分を受け入れてもらうことであった。

筆者は草稿の主題を、自分という存在を認めてもらうこと、自分を受け入れてもらおうと心の交流を求めることであると考える。水沢氏の示した草稿の主題、「孤児のさみしい『ごん』の絆を求めるところ」に通じる結論に達した。

続いて、筆者3名は定稿の主題を検討した。

定稿を草稿と比較するとさまざまなレベルの相違がある。本文の最大の相違は、用語のレベルにおいても、風俗のレベルにおいても、郷土色を払拭したことであろう。中には、修正者の誤解によると思われる改変もある。草稿の「腰に手拭をさげて、常とは好い着物を着た人達」という男たちの描写が、定稿では「よそいきの着物を着て、腰に手

拭をさげたりした女たち」となっている。沢田氏はこれに関して適切な指摘を行っている。また、草稿の生き生きとした子供という権狐像が定稿では削り落とされている。草稿の権狐は「外へ出たくてたまらないのをがまんして」いたのであり、雨があがると「すぐ」出ていったのであり、「ぱちやぱちやと」水音をたてて歩いたのである。これが定稿では改変されたり削除されたりしている。水沢氏が「子供と通有する無意識の行為の結果としての悪戯という面が捨象されてしまっているのである。」と述べているのに通じるところがある。が、結論を先に述べると、定稿の主題も草稿の主題と同様に、自分という存在を認めてもらうこと、自分を受け入れてもらおうと心の交流を求めることである。

定稿は小狐の「ごん」が兵十の家にいわしを投げ入れた場面で、「つぐなひに」という句が挿入してあり、「うなぎのつぐなひに、まづ一つ、いゝことをした」と改変されている。そのため草稿にあった章末の「そして権狐は、もう悪戯をしなくなりました。」という事実の記述は削除された。この「つぐなひに」の挿入によって、多くの読者が作品の教訓性を感受することになった。しかし、その後も贈り物を運ぶごんは、神様のお恵みだと兵十に誤解されたことを不満に思い、お礼を期待し、この行為者が自分であることを認めてほしいと望んでいる。これが改心した者の心理とは捉えがたい。最後に火縄銃でうたれた権狐は、兵十に認められてうなづく。筆者3名は、定稿の主題も草稿と同様であるという結論に達した。

注 記

(注1)『校定新美南吉全集』第10巻(大日本図書刊行、1981年2月)に収録。

(注2)『校定新美南吉全集』第3巻(大日本図書刊行、1980年7月)の「ごん狐」の
解題。

(注3)『広辞苑』第5版、岩波書店刊行、1998年11月第1刷。

(注4)『日本国語大辞典』第2版、小学館刊行、2000年12月～2002年1月第1刷。

(注5)「文学にとって主題とは何か」熊谷孝、『教育科学国語教育』第142号、1970年
8月。

(注6)「国語教育における文学作品の主題——『物くさ太郎』を例にして——」藤掛
和美、『豊田工業高等専門学校研究紀要』第13号、1980年11月。『国語授業論の新生』
(和泉書院刊行、1989年3月)に再録。

(注7)「国語教育における文学作品の主題—森鷗外『高瀬舟』を中心にして」近藤政
美・濱千代いづみ、『教育実践科学研究センター紀要』(岐阜聖徳学園大学)第3号、
2004年2月。

- (注8)「新美南吉」斎藤寿始子、講座日本児童文学第6巻『日本の児童文学作家1』、明治書院刊行、1973年9月。
- (注9)「草稿『権狐』と定稿『ごん狐』の比較・検討からの提言」沢田保彦、『新美南吉記念館研究紀要』第7号、2000年3月。
- (注10)「新美南吉『権狐』論——『権狐』から『ごん狐』へ——」木村功、『岡山大学教育学部研究集録』第111号、1999年7月。
- (注11)「新美南吉『ごん狐』における鈴木三重吉の改稿の位相」水沢不二夫、『湘南文学』第28号、東海大学日本文学研究会、1994年3月。
- (注12)『国語 四年下』2002年度版(光村図書刊行、2001年1月検定)の指導書。
- (注13)『小学校 国語 4年下』2002年度版(学校図書刊行、2001年1月検定)の指導書。
- (注14)『「ごんぎつね」をめぐる謎』(府川源一郎、教育出版刊行、2000年5月)による。
- (注15)『児童文学』安藤美紀夫、学術図書出版社刊行、1984年3月。
- (注16)『南吉童話の成立と展開』続橋達雄、大日本図書刊行、1983年12月。
- (注17)『「ごんぎつね」における主題指導に関する考察』一川鐵夫、『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第8号、1988年3月。
- (注18)『文学教育 その実り豊かな実践のために』安藤操、新評論刊行、1978年8月。
- (注19)『文芸作品の主題の理論と指導』養手重則、明治図書刊行、1973年4月。

付記（近藤）

岐阜聖徳学園大学大学院では教育職員専修免許状を取得するための講座を開設しました。私が担当した国語教育特論（平成15年度）では、主として文学作品の主題について考察しました。本稿はこれに参加した遠藤（岐阜市立白山小学校教諭）・濱千代（豊田工業高等専門学校教授）との共同研究です。

国語教育において文学作品の主題を考究するための方法として、藤掛和美氏のモデルを参考にしました。彼は昭和30年代に名古屋大学文学部で一緒に学んだ後輩です。長年にわたって高校に勤務した後、中部大学教授になり、名古屋大学でも国語教育の講義を担当しました。『国語授業論の新生』（本論注6）では御伽草子の「物くさ太郎」を例にして論じています。広く知られていないが、すぐれた論考であります。

新美南吉著「ごんぎつね」は昭和31年に始めて小学校の国語教科書に取り上げられ、以後多くの人々に読まれ、研究されるようになりました。作品の主題に関しても近年盛んに論じられています。が、その中でも沢田保彦氏の論文が注目されます。南吉の草稿と『赤い鳥』に投稿して掲載された定稿（鈴木三重吉が修正）とでは主題が食い違ってしまっているというのです。沢田氏は南吉と同郷の愛知県半田市の人です。南吉が学んだ半田中学校（現、半田高校）の同じ教室で昭和20年代に彼と隣席で勉強していた私には、この地方の風土や言葉・思考方法の説明について理解できます。が、主題の説明に関しては一般的に誤解されやすいと思います。彼の真意を読み取るために、筆者3名がそれぞれの立場から解釈を試みて検討した結果、草稿「権狐」の私主題としてすぐれた見解であると判断して取り上げました。

本稿に先だって、森鷗外著「高瀬舟」の主題について考察しました（本論注7）。この作品については作者本人が「高瀬舟縁起」の中で主題ともいうべきこと（原主題）を述べています。ところが草稿「権狐」の場合、南吉自身が主題に関してはっきりしたものを書き残していないと思われまます。そこで筆者3名の受け内容における重なりあうイメージという線で原主題を考究することにしました。

ご批評を賜りたいと存じます。